
さくら色ドロップ

碧海ユズ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくら色ドロップ

【Nコード】

N0370Z

【作者名】

碧海ユズ吉

【あらすじ】

環境汚染された近未来。

電脳世界では人工知能の発達で電子体と呼ばれる自律AIが暮らし、バーチャルリアリティは様々な娯楽を提供していた。

乙女系恋愛ゲームもその一つ。京は親友に誘われて、乙女ゲー専門V・Sカフェで乙女ゲームの電脳空間に潜水することになった。

軽い気持ちで潜水した女子高生が体験する、歪んだ恋のお話。

個人サイトからの転載作品です。

第1話 地下街・映像潜水・さくら色ドロップ

なにやってるんだろう。

さつきから自分の視線は、迷子の風船を追いかけていた。

さすがに清掃がいき届きにくく黒ずんでしまっている天井の隅っこ、赤い風船が窮屈そうにフワフワと漂っている。

ゴム繊維に織り込まれたモニタ粒子の結合で、風船の表面には子供用の広告映像が繰り返し繰り返し流れていた。教育テレビによくでてくるアニメキャラが愛嬌のある憎たらしい笑顔で跳んだり跳ねたり。

視線を水平に戻すと、ここが都会の地下だとは思わせない広い車線が続いている。

こちらの手を掴んで、問答無用で引きずって進んでいく四田（しだ）ちゃんの背中が、人混みの中で堂々としたオーラを放っていた。理不尽な四田ちゃんの行軍はこちらの歩調をまったく考慮していないので、時折足がもつれ、通行人にぶつかりそうになった。

通行人が立てる靴音が、何重と分厚いノイズの波となり、閉塞した空間を震わせる。

車線道路の両側には混沌とした店が呆れるほど並んでいた。デイスカウトショップやら、ジャンクフード店やら、今時珍しい紙製の書店なんてものまで何でも揃っている。

都会の蟻塚と言わしめるほど、複雑に入り組んだ積層地下街。

今や人工現実感の発達に伴ってサイバーマルチセンサーシステム

が確立された時代、最先端をいくこの街は電子との共存というものを様々な形で体現していた。

店頭で立体映像のデモムービーがはしゃぐのはもはや基本商法として、昔の時代を生きていた絶滅種と戯れることができる古代生物館（もちろん全て人工現実感でできた電子の塊なのだが、見た目も触感も匂いも生々しいと思う再現率だ）、環境汚染で禁じられた娯楽の幾つかも体験できる。例えば海水浴とか。

特に、今世紀の成果は、環境維持機構の人工智能に自立的な自我が芽生えたこと。

自我に目覚めた人工智能をもとに、大量生産された自律AIが一般流通にも充分行き渡るほど普及したことで、社会はさらに機械文明の森に迷い込んでいった。

つまり人工現実感　バーチャルリアリティそのものに、心というものが付加される時代が訪れたのだ。

これによって無機物特有の『のっぺら感』はほとんど解消されて、親しみやすい媒体というイメージを消費者に与えることに成功。

一見使い道がなさそうなファクターではあるけれど、このAIプログラムが配布されたことで改善されたものもある。

柔軟な学習思考を得た末に、機械の音声認証や視線認証などの誤差は大幅に減らせたというし、ロボットにありがちな不気味な『のっぺら感』が無くなったのは大きな功績だ。

なんだってそこには心があるから。

そしてバーチャルに自我を植え付けるといふ突飛なAIプログラムは、ある娯楽において驚異的な需要を叩きだしていた。

「ねー、四田ちゃん。やっぱりやめましようよー、わたし映画潜水

館にいきたいです。最新作のアクションムービーやってるんですけど。今なら割引価格で見られるのに」

映像の世界に意識を潜水させる体感形式、それを採用しているものの一つが映画潜水館。自分を中心として周囲でめまぐるしく動き回る立体的なアクションシーンは大迫力、見応えがある。初めて見たときの高揚を、未だに忘れることができない。

他の観客に椅子を後ろから蹴られることも、ジャンクフードをバリバリ咀嚼する不快な音も、他の観客に聞こえるくらいの音量で口を突いて出る悪態も、なにものにも邪魔されずに思う存分楽しめる。システム上、精神への負担が多少かかるのがデメリットだ。そのため安全を図る意味で15禁にレイティングされている映像潜水式は、京（みやこ）にとって長年憧れの的だった。

はやく自分もリアルに映像を体感したくてウズウズしていた。潜水式を採用している映画館に去年ようやく入ることが許されて以来、新しいオモチャに興奮する子供のように結構な頻度で通い詰めているのだ。

しかし前に行く四田ちゃんは、ぐだついた懇願を気の強い笑みで弾いてしまう。

「映像潜水式が好きなら、これから行くところだって充分満足できるはずでしょ」

「……。だってえ、そこは興味無いんですもん……」

「ヤコ、好き嫌いはいくないって。地味なあんたが花開くかもしれないでしょ」

好き嫌いという以前に興味が無いと何度言ったら。意図的に話をずらす四田ちゃんに、つつい京は恨めしげな半目を向けてしまう。学生の休日、四田ちゃんと地下街に繰り出したことに早くも後悔してきた。

事の始まりは学校の休み時間。

最近、男子生徒も女子生徒も等しく共通の話題を膨らませる光景を、この頃よく目にしていた。みんなタチの悪いウイルスに集団感染したみたいにとある話題を展開させている。

つぎ誰落とす？ あたしはあの子かなー。昨日コクるところまでいつてさー。あそこの選択肢は難しいよね……。

話の本筋を理解していることが前提の、傍からしたらなにを対象に語っているのかわからない。

仲間はずれも嫌なので、少しでも興味があるフリをして話の輪に突入したのが運の尽き。まったくもってもう勘弁してくださいと拒否したくなる話題だった。

実際には、最近、という言葉は当てはまらない。それは映像潜式という魅力を感じたばかりの年頃の少年少女達が、すべからく経験する一種の通過点だったからだ。

すなわち電脳空間にダイブする優越感と感覚に夢中になる、青臭い時期。

このシーンが意識と隣り合わせのところで再現されている。すごい。ならこのジャンルで映像潜水したらどうなるんだろう？ 新しいことに目覚めた子供たちは見境がなくなるほど探求していく。

そして極めつけは、こういうシチュエーションを再現したいと思いつく。しかも欲望満タンの学生の頃に誰もが一度は通る道。

そこに風が吹き溜まるようにして、『学生』のあいだで常にトレンドとなっているのが、

「なんで私、乙女ゲーやりにいかなきゃいけないんですかねー……」

恋愛シミュレーションゲーム。

シシシ！ モーモーシリアル、お店で売ってるよ！ 甘くてオイシくてボクもうお腹いっぱいユメをみているみたい。

視線をあげた先で、からかうように風船の中のキャラクターがぴよんぴよん跳ねているのが憎たらしいったらありやしない。

圭太（けいた）、離れたくないよ、ねえ、圭太。

乙女ゲーというコンテンツを久しぶりに耳にしたとき、ちよつぴり昔の甘酸っぱい記憶が胸をよぎった。昔といってもそんなに昔じゃない、十五歳になって二ヶ月経った頃のこと。けれどもあの時に体験した記憶は、ずっと心の底で静かに息づいている。

恋愛バーチャルシミュレーションが思わぬ脚光を浴びたのは、自律AIが一般に普及してすぐのことだった。

それまでも恋愛ゲームに現を抜かす人はいて、まともに返事もくれない二次元の『彼氏』『彼女』を愛でることを、社会は揃って気持ち悪いとバカにしたものだった。

しかし自律AIを、恋愛ゲームの攻略キャラに付加したとしたら、どうだろう。

どんなに焦がれても反応をくれなかった画面の向こうの『恋人』たち。

彼らに心ができて、木偶人形とバカにすることができなくなり、現実と等しく滑らかなコミュニケーションを可能としたなら？

好きだ、という言葉に感情を垣間見ることができたとしたら。

答えは、現代のありかたにそのまま反映された。恋愛ゲームジャンキーがいつの世代にも一定層は潜むほどの中毒性を持ち、恋愛ゲームに潜水できる専門のバーチャルシミュレーターカフェ（長いので、V・Sカフェというのが俗称）なるものが我もと競うように全国に建ち並ぶ光景。

生身の人間よりも電子のキャラクターと恋を語らうほうが有意義。そんな風潮もまた形成されていってしまった。

かくいう京も、一度だけ電腦恋愛の中毒性に骨抜きにされた一人

だった。

そして恋愛ゲームに手を出して、傷ついたからこそ、今日にいたるまで恋愛ゲームを頑なに避けていたのだ。断言する、あれはろくなもんじゃない。

なのに、流れに抗うこともできず、結局戻ってきてしまった。

四田ちゃんが足を運んだのは、近くにケーキバイキングや、乙女系同人グッズを取り扱ったショップが完備された、いわゆる客層を乙女な女の子向けに意識した大通りの一角。

白と暖色系で統一された大型の建物に、ポップな字体で『V・Sカフェ さくら色ドロップ』という映像ロゴが飾られている。

ケバいどころか、薬局店のように清潔な趣を心がけているのは安心した。フワフワ甘い店名で台無しな気もするけれど。

ここが四田ちゃんの行きつけ、乙女恋愛系専門V・Sカフェらしい。乙女ゲーしか取り扱っていないのにも関わらず経営が維持できていることから、需要は推して知るべし。

「とーちゃーく。特別に今回はあたしがおごるよ、割引ポイントもあるしい」

先程の映画潜水館のお返しか。四田ちゃんの不思議猫のようなニタニタ笑いに、京は釈然としなくて唇を噛む。

「私の四田ちゃんはこんなことしないで、ハッ、さては四田ちゃんの皮を被った電子ミュータントですね！」

「このあいだの映画の影響モロ受けすぎなんですけど。いい、ヤコ？ これはあんたのためでもあんのよ。学校で話題に乗れずに孤高を気取ってたら、すぐにハブされるんだからさ。触りだけでも知るときゃあ、あとは適当に話し合わせられるじゃん？」

「そこが学校生活の面倒なところですね……」

学校という一種の閉鎖空間で展開される交友は、しばしばナイフのように鋭く残酷な一面をみせる。

彼らの流行に合わせるか否か、今後の付き合いも考えると死活問題だった。なにがきっかけで無視されたりいじめられたりするかわからない危うい部分が学校生活にはある。

四田ちゃんはその辺、うまく渡り歩いているよなあ、といつも感心していた。彼女と親友になれたことは、窮屈を強いられる学校で数少ない幸運だ。

とりあえず正論過ぎていよいよ反論が喉の奥で潰える。がつくりと肩が落ちる。重い溜息は、どこからともなく聞こえてくるアニソンに掻き消された。

「わかりました。いきます」

「そうこなくっちゃ。ああん、待っててねウィルきゅん。すぐに口グインするから！」

後半はここにはいない、というより恐らくこの汚染された現実世界にはそもそも存在すらしていない誰かに向けて放たれたもの。両手を組み合わせてご機嫌な四田ちゃんに、ついに返す言葉を失う。

なんだかんだ言って、彼女もずいぶん毒素の強い乙女ゲーに入れ込んでしまっている。

ともあれ、店の前で立ち往生するのもなんなので、気が進まないけれども四田ちゃんを促して『さくら色ドロップ』の入り口を潜った。

入店してすぐのところに、攻略ガイドが記された電子ペーパーのラックがあり、ついでに店で取り扱っているソフトの派生グッズが商品棚に陳列されているのが目に入った。専門のグッズショップには遠く及ばない品揃えだが、そこそ売れているのかもしれない。

無視して受付に辿り着くと、愛想の良い女性店員の笑みが迎えてくれる。

「ようこそ、『さくら色ドロップ』へ。身分証明書と会員カードを確認しますので、お出くださいー」

映像潜水式を採用している店は、厳重に年齢確認をするのがマニュアルだった。

四田ちゃんと一緒に住民IDカードを提出、店員が慣れた手つきで認証機に通し、真面目と不真面目の中間くらいの目つきで事務的に確認を終えてからIDカードを返却。

「この子初めてなんですけどー」

四田ちゃんの手が京の肩をポンと叩くと、店員は緩い態度をさらに軟化させる。

「でしたら、初めに会員カードの作成とセーブデータ保管先の決定をして頂きますう」

その後も当店の説明とやらを片手間に聞き流しながら、手順に沿って会員カードを作る。

「ではセーブデータの保管先を決めさせて頂きまーす。二通りありまして、一つはお持ちのケータイに保存する形式、もう一つはデータカードを作成して保存する形式です。ケータイタイプは、いつでもどこでも『恋人』のデータを閲覧でき、会話をすることもできます。カードタイプですと、そういったことはできなくてですねえ、もっぱらデータを保存するしか機能はないんですけど、そのぶん容量とか安全性は高いですよ。カード自体も耐久性があるから落としても壊れにくいですし」

どっちにします？ と問われ、

「カードをお願いします」

即答すると、隣ですでに入店手続きを終えてペーパーラックを眺めていた四田ちゃんが、よく分からない同意を示してきた。

「やっぱそっちにするよねえ。ケータイタイプは会話できて気分が盛り上がるけど、カードのほづが安心できるっていうか」

「う、うん……そうですね」

単にこんなことで貴重なケータイのメモリを圧迫しなくなかったからなんだが。

利用時間は二時間にしておいた。熱中してついつい時間を忘れてしまうタイプの店には必須の、時間規約。

中でもロールプレイ型バーチャルシミュレーションは、時間加圧というシステムが組み込まれている。簡単に言えばゲームの中で過ごす一時間が、現実世界ではたった十分しか経っていないといった、脳の処理速度を速くする仕組みだ。

問題となるのは実際のプレイ時間なので、システム上ゲーム内で何日過ごしてもプレイ時間が一定の値にまで至らなければ問題は無い。

標準的な加圧設定は『一時間＝十分』で、利用時間が現実の二時間ならば、ゲーム内では十二時間も過ごせることになる。

「では、ごゆっくりお楽しみくださいーい」

なんだか安っぽいホストクラブの世界に踏み込んでしまったような気がして、こっそり米神に指を添えた。

個室に入って、一息ついた。

入室してしばらくすると、『入室者の容姿を取り込みました』といった意味の清潔な電子音が鳴った。ここでスキャンングされた容姿データは、多少のデフォルメ補正をかけたのち、電腦空間にログインしたときの自分の姿に使うことができる。

飲み物や軽食を広げられるテーブルと、壁に埋め込まれた検索用小型レンズ、全身を預けて寝そべるタイプのダイブチェア。それだけで構成された極々手狭な空間が、無限の電腦空間に飛び立つ庶民的な門なのだった。

ほんと、なにやってるんだろう。

セルフサービスで作ってきた飲み物を一口含み、溜息と共にテーブルに置いた。

料金は四田ちゃんが持ってくれたから、無下に帰ることもできない。せつかくだから久しぶりに遊んでいこう。

渋谷腹をくくり、唯一の座席であるダイブチエアに身を沈める。マッサージチエアをモデルにデザインを研究したのだという。素晴らしい体にフィットして寝心地はいい。

茶がかった二つ結いの髪が首をくすぐるので、軽く外に払って居心地を確保。

検索レンズの前に手をかざす。するとセンサーが反応して起動状態に移るので、つまむ動作で電子画像を引きずり出した。

京の目の前に、検索メニューが爽やかな擦過音と共に並ぶ。店にインプットされている乙女ゲーソフトが瞬く間にピクアップされた。

ネットでちらっと見かけたことがあるタイトル。それらには目もくれずに適当なものを探す。真面目にプレイする気も無ければ恋愛する気も無いから。

いくつかのタグを使ってゲームを絞り込んでいくと、あるソフトが目に入った。

『ここは乙女のデイストピア』

男の子と恋愛して幸せな時間を過ごすというコンセプトに、真っ向から喧嘩を売ったような残念なタイトルであった。

逆に興味を覚えて、詳細なページを開いてみる。

いわゆるネタに走ったバカゲー。マイナー寄りの作品だ。攻略対象の少年たちの笑みが、どこことなくあくどそうなのはあれだろうか、デザイナーの趣味なのか自分の目がおかしいのか。

ジャンルは現代学園もの。攻略対象者は全て優秀で家柄もよくて

美形、ただし何かしらの致命的な欠点を抱えているらしい。君の愛で彼らを矯正してあげよう！ というキャッチコピーが新鮮だった。これなら感情移入せずに遊べるかも。決めた。

『ここは乙女のデイストピア』を読み込ませ、あとはセーブデータ用カードを、ダイブチェア付属のポケットに差し込む。プレイするにあたって主人公の基礎データを作成する。名前はどうか、容姿データは読み込みしたものを使うかソフトで用意されたアバターを使うか……。

これで準備完了、久しぶりだからちょっとドキドキした。

圭太。憂鬱とも甘いともいえる不思議な気分を、今日一日で何回も思い出している。

もうあんな恋はしない。恋愛ゲームであんな思いは、したくない。深呼吸で体から力を抜き、ダイブチェアと連結したパーソナルディスプレイを装着する。コンパクトな機器に目回りが覆われ、視界が暗闇に閉ざされた。

『潜水します。どうぞ快適な仮想現実を』

脳内に直接木霊するアナウンス。新しい世界に飛び立つにふさわしい、落ち着いた声音に背中を押される気分で、京の意識は広大な電子の海に潜っていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0370z/>

さくら色ドロップ

2011年12月1日18時52分発行